

2020年卒
Vol.03

1月1日時点の就職意識調査

キャリアス就活 2020 学生モニター調査結果 (2019年1月発行)

3月の就職活動本番を2カ月後に控えた1月1日時点で、2020年卒学生の準備状況はどこまで進んでいるだろうか。キャリアス就活・学生モニターを対象に、就職意識および就職活動の準備状況などを尋ねた。前年同時期調査との比較や、昨年11月に実施した前回調査からの変化に着目して分析したい。

1. 就職活動準備状況

- 全体的にポイントが増え、準備のタイミングが早期化
- 「企業研究」は前年同期より9.5ポイント増。個社に目を向けるタイミングも早まった

2. インターンシップ参加状況と参加企業からのアプローチ

- インターンシップ参加者は全体の89.2%。1日以内の短期プログラムへの参加が増加
- インターンシップ参加後に企業からアプローチを受けた学生は8割以上に上る(86.0%)

3. 現時点の志望業界

- 「明確に決まっている」25.6%。11月調査より4.2ポイント増。「決まっていない」29.9%
- 志望業界1位「医薬品・化粧品」、2位「電子・電機」「素材・化学」

4. 就職先企業を選ぶ際に重視する点

- 「将来性がある」48.1%、「給与・待遇が良い」44.9%、「福利厚生が充実」30.7%の順
- 「仕事内容が魅力的」は3年ぶりに2割台を回復(20.6%)

5. 1月1日時点の本選考受験状況と内定状況

- 「本選考を受けた」29.3%。受験社数は平均2.4社
- 「内定を得た」4.7%。前年同期(3.1%)より1.6ポイント上昇

6. 就職活動解禁までの準備の進め方

- 「志望業界・企業への理解を深める」63.7%、「インターンシップにたくさん参加」55.6%

7. ベンチャー企業への関心

- ベンチャー企業への就職に関心がある学生は28.3%。前年調査より3.6ポイント増加
- 関心がある理由は「企業として独自の強みがある」41.1%、「やりたいことができる」40.5%

8. 就職後のキャリアプラン

- 「一つの会社に定年まで」が減少し(43.0%)、「転職でキャリア・アップ」(42.1%)と拮抗

調査概要

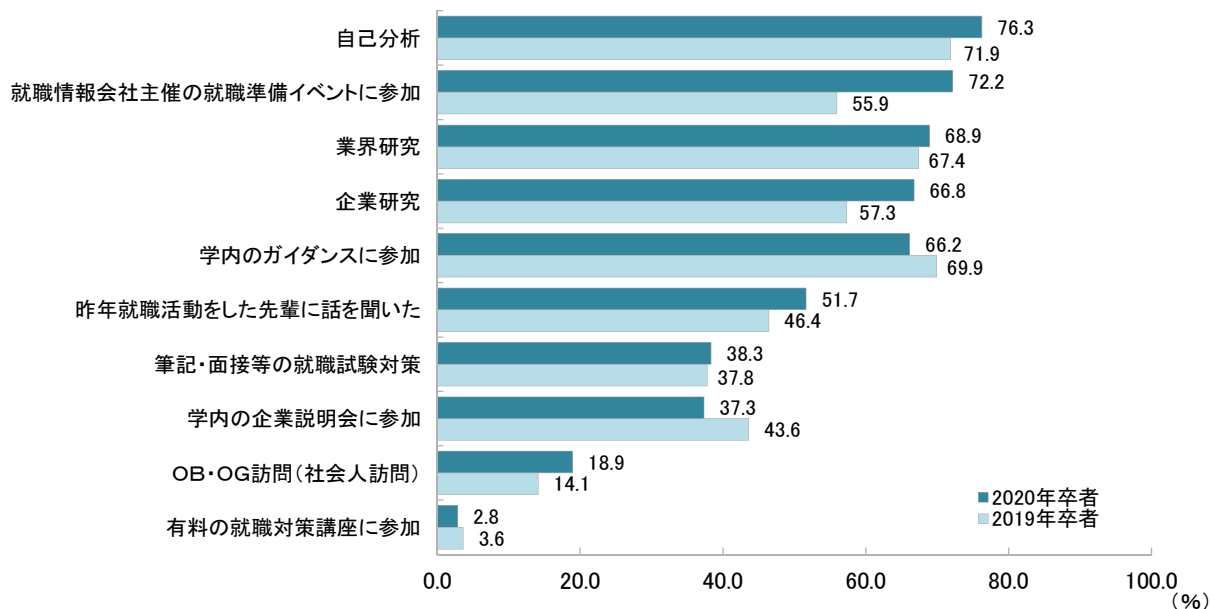
- 調査対象 : 2020年3月に卒業予定の大学3年生(理系は大学院修士課程1年生含む)
回答者数 : 1,210人(文系男子395人、文系女子366人、理系男子294人、理系女子155人)
調査方法 : インターネット調査法
調査期間 : 2019年1月1日~7日
サンプリング : キャリタス就活2020学生モニター(2016年卒以前は「日経就職ナビ・就職活動モニター」)

1. 就職活動準備状況

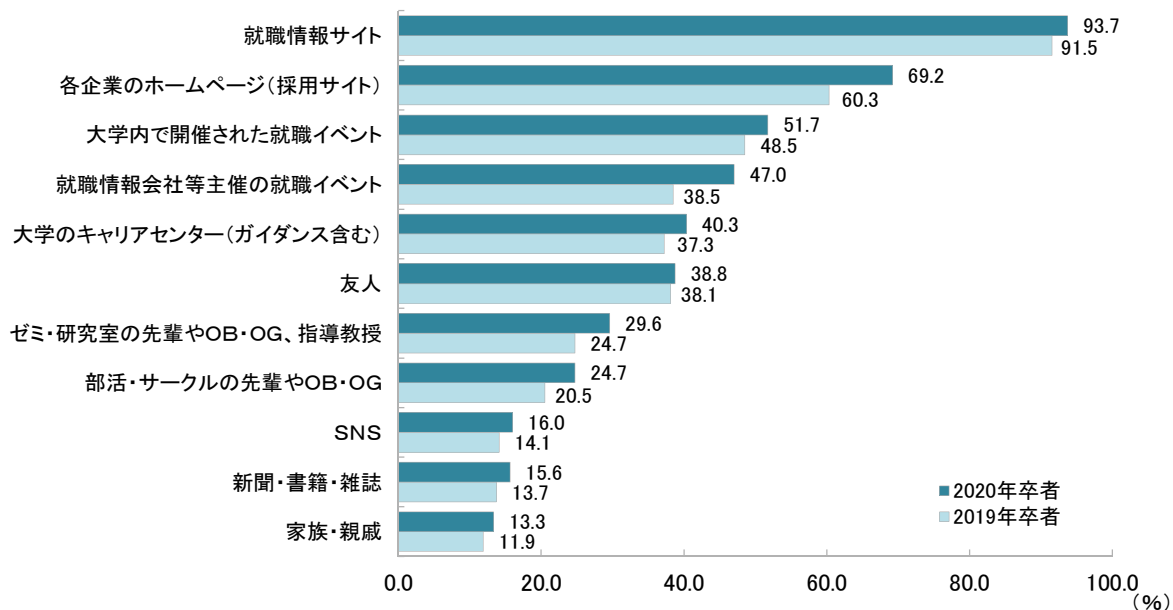
就職活動の準備として行ったことを尋ね、前年同期調査の結果と比較した。全体的にポイントが増えており、前年よりも早く取り掛かっている様子が読み取れる。とりわけ「就職準備イベント」が大きくポイントを伸ばしているのが目立つ (55.9%→72.2%)。また、「業界研究」と「企業研究」に着目してみると、前年は両者の差は約 10 ポイントあったが、今回その差は約 2 ポイントに縮まった (業界研究 68.9%、企業研究 66.8%)。インターンシップなどをきっかけに個社に目を向けるタイミングが早まり、企業研究のポイントが大きく増えたのだろう。

就職活動に関する情報の入手先にも同様の傾向が表れている。「各企業のホームページ (採用サイト)」が約 9 ポイント増え (60.3%→69.2%)、企業研究のために早い時期から個社の情報を取りに行く学生が増えた。ただし、最も多いのは依然「就職情報サイト」(93.7%)。インターンシップを探したり、応募したりするために欠かせない情報源であることがよくわかる。

<就職活動準備でこれまでにやったこと>



<就職活動に関する情報の入手先>



2. インターンシップ参加状況と参加企業からのアプローチ

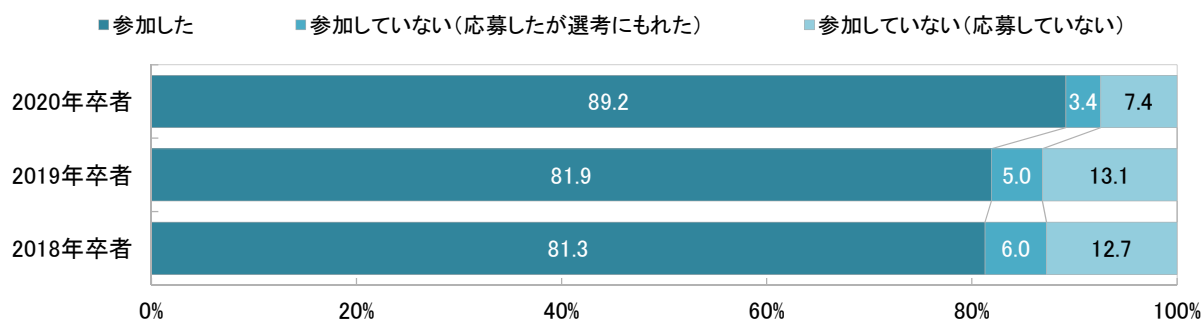
インターンシップの参加経験や参加したプログラム日数を尋ね、3 年分のデータを比較した。

インターンシップに参加経験を持つ学生は、約 9 割 (89.2%)。前年の高い水準をさらに 7.3 ポイント上回り、就職活動開始前のインターンシップ参加が一般化していることがわかる。

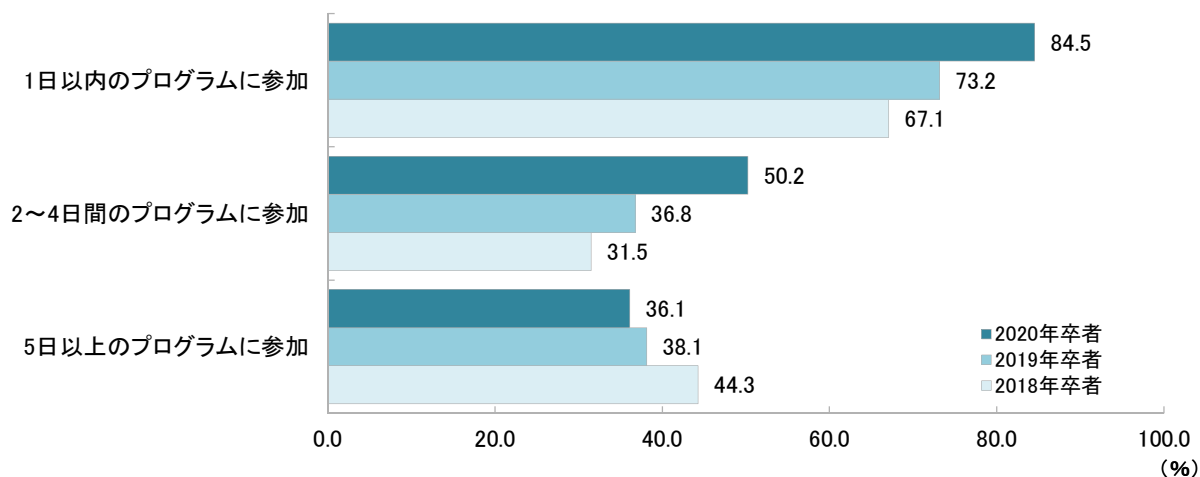
参加期間 (プログラム日数) ごとに参加状況を見ると、最も多いのは「1 日以内」。前年より 11.3 ポイント増加し、8 割を超える (84.5%)。インターンシップ参加経験者のほとんどが「1 日以内」のものへの参加経験を持つ計算だ。「2~4 日間」も前年より大幅に増加し過半数に上った (50.2%)。一方、「5 日以上」は 36.1%と、2 年連続減少。経団連が日数要件を撤廃したことで、前々年から前年にかけて、短期プログラムへの参加者が増加したが、今年はその傾向がさらに強まった。

平均参加社数を見ると、最も多いのは「1 日以内」(4.8 社) で、前年より 0.7 社増加。「2~4 日間」(2.0 社) は前年より 0.3 社増、「5 日以上」(1.5 社) は 0.1 社増と、1 人あたりの参加社数は微増にとどまった。なお、文理別に見ると、男女ともに文系の方が理系より参加社数が多い。ただし、大きな差はなく、研究などで忙しいと言われる理系学生も、短期開催のものを中心に参加を重ねていることがわかる。

<インターンシップ参加経験>



<プログラム日数別参加状況>



<プログラム日数別参加社数>

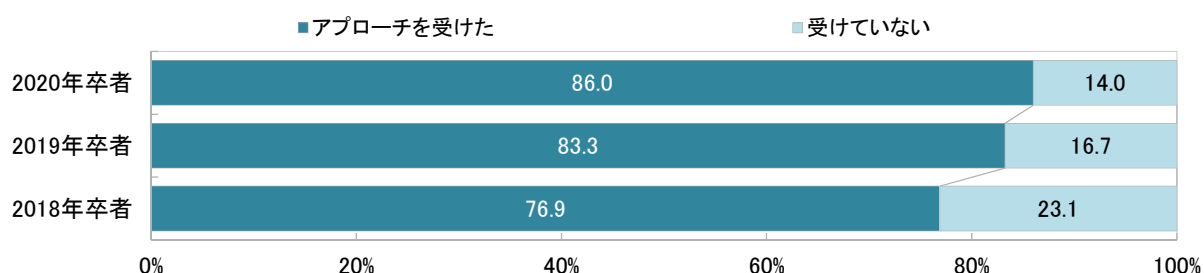
(社)

	2020年卒者	文系男子	文系女子	理系男子	理系女子	(2019年卒者)	(2018年卒者)
1日以内のプログラム参加社数(平均)	4.8	5.3	5.0	4.0	4.4	4.1	3.1
2~4日間のプログラム参加社数(平均)	2.0	2.2	2.1	1.8	1.9	1.7	1.6
5日以上プログラム参加社数(平均)	1.5	1.7	1.4	1.5	1.2	1.4	1.8

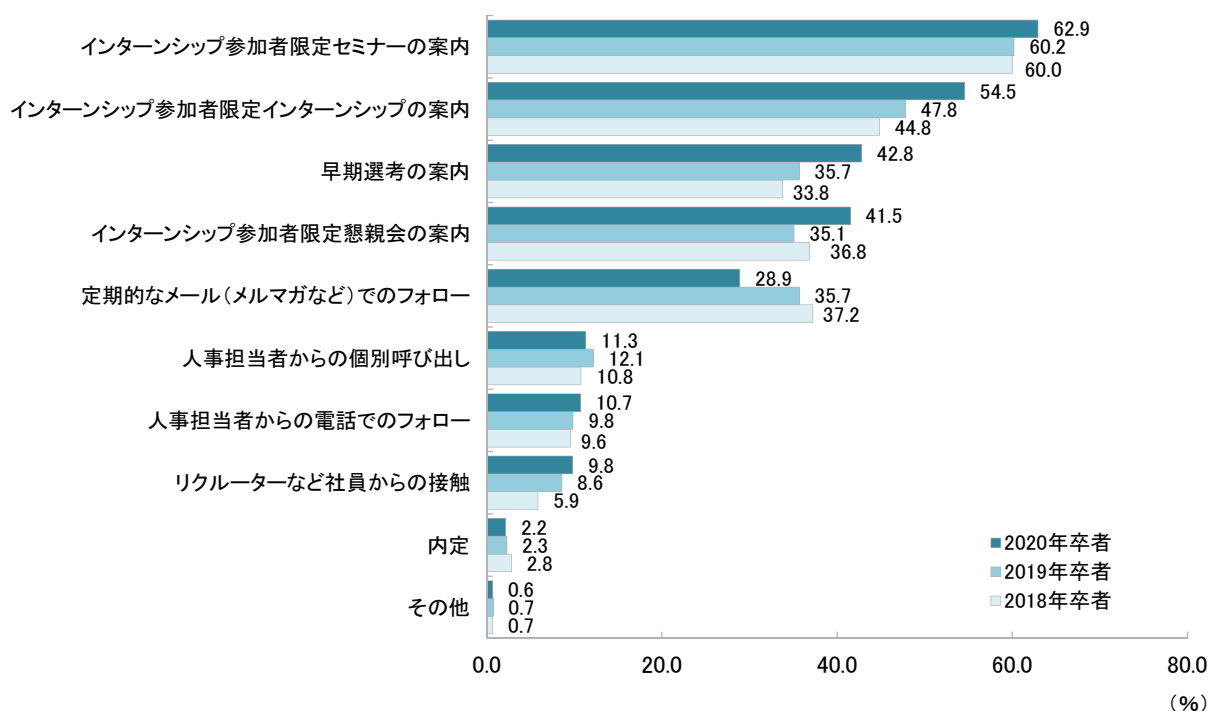
インターンシップに参加経験のある学生 (全体の 89.2%) を対象に、インターンシップ参加後に企業からアプローチを受けたか尋ねたところ、「アプローチを受けた」学生は 8 割を超えた (86.0%)。前々年調査より 9.1 ポイント増加。大半の学生が何らかのアプローチを受けており、インターンシップ参加者へのアプローチも一般化してきたと言える。

加えてどのようなアプローチを受けたかを尋ねると、「インターンシップ参加者限定セミナーの案内」が最も多く、6 割強 (62.9%)。2 番目に多かった「インターンシップ参加者限定インターンシップの案内」(54.5%) は前年より 6.7 ポイント増加。「早期選考の案内」「インターンシップ参加者限定懇親会の案内」もポイントを伸ばした一方、「定期的なメールでのフォロー」は 6.8 ポイント減少。間接的なアプローチが減少し、直接的な接触を図るアプローチが増加した。インターンシップ後にも継続的に接触機会を設けることで、参加者を囲い込んで採用につなげようという企業の狙いがうかがえる。

<インターンシップ参加後に企業から受けたアプローチの有無>



<インターンシップ参加後に企業から受けたアプローチ>



■インターンシップ参加後のアプローチについて

○インターンシップからそのまま本選考に移ることがとても多いので、インターンシップは重要だと思う。

<理系女子>

○自身が参加したインターンシップからの、参加者優遇が思っていたよりも多いので、逆に自身が参加していない企業に対しては相対的に不利になるのではないかと考えている。

<文系男子>

3. 現時点の志望業界

1月1日時点での志望業界の決定状況は、「なんとなく決まっている」という学生が最も多く、44.5%。「明確に決まっている」学生は25.6%で、前回の11月調査(21.4%)より4.2ポイント増加した。一方で、「決まっていない」が29.9%と約3割に上り、前回調査(26.7%)よりも増加した。前年同期(22.6%)と比べても高く、業界を絞らずに就職活動を進める層が増えている可能性があるほか、インターンシップなどで企業と接点をもつ中で、志望業界を見直す学生も一定数出てきていると見られる。

志望業界のある学生に具体的な業界を尋ねたところ(40業界から5つまで選択)、全体で最も多かったのは「医薬品・医療関連・化粧品」(18.2%)。次いで「電子・電機」「素材・化学」が同率で続く(16.0%)。前年同期調査とトップ3が入れ替わった。なお、志望業界は属性によっても異なり、文系男子では「商社(総合)」が首位で、文系女子は「マスコミ」。理系は製造業が上位に多く、理系男子は「電子・電機」、理系女子は「医薬品・医療関連・化粧品」が最も多い。

<志望業界の決定状況>

(%)

	全体	(11月後半調査)	(前年全体)	文系男子	文系女子	理系男子	理系女子
明確に決まっている	25.6	21.4	27.5	23.3	20.8	29.6	35.5
なんとなく決まっている	44.5	51.9	49.9	42.0	43.4	50.0	42.6
決まっていない	29.9	26.7	22.6	34.7	35.8	20.4	21.9

<志望業界(上位20業界)>

※5つまで選択 (%)

	全体	文系男子	文系女子	理系男子	理系女子
1 医薬品・医療関連・化粧品 ⑧	18.2	商社(総合) 23.3	マスコミ 25.5	電子・電機 28.6	医薬品・医療関連・化粧品 42.1
2 電子・電機 ④	16.0	銀行 19.8	銀行 17.4	情報・インターネットサービス 25.6	素材・化学 33.9
素材・化学 ⑤	16.0	調査・コンサルタント 17.8	ホテル・旅行 16.6	素材・化学 23.5	水産・食品 29.8
4 情報・インターネットサービス ①	15.7	官公庁・団体 16.7	調査・コンサルタント 16.2	機械・プラントエンジニアリング 20.9	建設・住宅・不動産 18.2
調査・コンサルタント ③	15.7	運輸・倉庫 15.9	運輸・倉庫 15.7	自動車・輸送用機器 20.9	官公庁・団体 15.7
水産・食品 ⑨	15.7	建設・住宅・不動産 15.5	建設・住宅・不動産 15.3	情報処理・ソフトウェア・ゲームソフト 20.5	情報処理・ソフトウェア・ゲームソフト 14.9
7 建設・住宅・不動産 15.1	電子・電機 14.7	医薬品・医療関連・化粧品 14.9	精密機器・医療用機器 19.7	調査・コンサルタント 14.0	14.0
8 商社(総合) 14.0	マスコミ 14.3	水産・食品 14.5	医薬品・医療関連・化粧品 18.8	電子・電機 11.6	11.6
9 官公庁・団体 ⑦	13.3	エネルギー 12.8	商社(総合) 12.8	水産・食品 13.7	情報・インターネットサービス 10.7
10 情報処理・ソフトウェア・ゲームソフト ⑤	13.0	商社(専門) 12.8	情報・インターネットサービス 11.9	調査・コンサルタント 13.7	精密機器・医療用機器 10.7
マスコミ	13.0	情報・インターネットサービス 12.4	教育 11.5	建設・住宅・不動産 12.8	ゴム・ガラス・セメント・セラミックス 9.1
12 銀行 ②	12.9	保険 12.4	人材紹介・人材派遣 11.1	ゴム・ガラス・セメント・セラミックス 12.0	エネルギー 8.3
13 運輸・倉庫 ⑩	11.9	水産・食品 12.0	保険 11.1	官公庁・団体 11.1	商社(専門) 8.3
14 自動車・輸送用機器 11.6	自動車・輸送用機器 10.9	官公庁・団体 10.6	鉄鋼・非鉄・金属製品 11.1	商社(総合) 7.4	7.4
15 エネルギー 10.4	医薬品・医療関連・化粧品 9.3	情報処理・ソフトウェア・ゲームソフト 9.4	エネルギー 10.7	自動車・輸送用機器 6.6	6.6
精密機器・医療用機器	10.4	教育 8.9	エネルギー 8.5	通信関連 10.7	印刷・パッケージ 5.8
17 機械・プラントエンジニアリング 9.2	素材・化学 8.9	エンターテインメント 8.1	運輸・倉庫 8.5	農業・林業・鉱業 5.8	5.8
18 ホテル・旅行 8.1	情報処理・ソフトウェア・ゲームソフト 8.5	印刷・パッケージ 7.2	商社(総合) 8.5	マスコミ 5.0	5.0
19 保険 7.8	ホテル・旅行 8.1	素材・化学 7.2	銀行 6.8	教育 5.0	5.0
20 通信関連 7.5	通信関連 8.1	電子・電機 7.2	農業・林業・鉱業 6.4	鉄鋼・非鉄・金属製品 5.0	5.0

※○の中の数字は前年同調査の全体順位10位以内

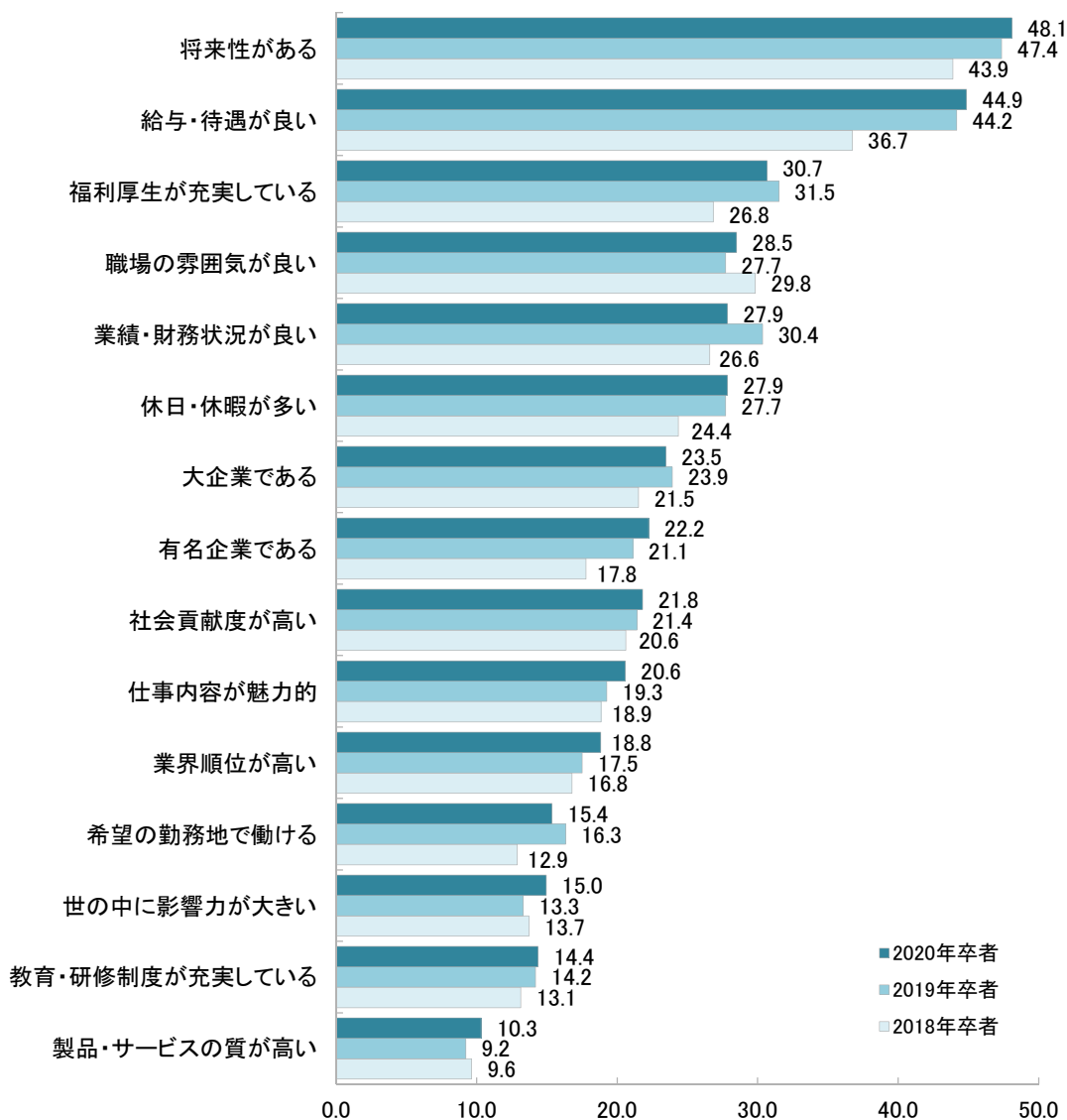
4. 就職先企業を選ぶ際に重視する点

就職先企業を選ぶ際に重視する点を 30 項目の選択肢の中から 5 つまで選んでもらった。

1 位が「将来性がある」で、2 位が「給与・待遇が良い」である点は前年・前々年調査と変わらないが、ともにポイントが増加している。特に「給与・待遇が良い」はこの 2 年で 8.2 ポイント上昇し、こだわる学生が増えている様子がわかる。「将来性がある」は今回で 9 年連続 1 位となり、学生の就職先選びにおいて重要な要素として定着している。続く「福利厚生が充実している」(30.7%) や、5 位の「休日・休暇が多い」(27.9%) も上位項目の常連となっており、働きやすさやワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)も重要な要素として捉えられている。企業の採用意欲は依然高く、学生優位の売り手市場が今期も予想されていることから、条件や待遇重視の姿勢は今期も続くと見ていいだろう。

一方、「仕事内容が魅力的」は 20.6% と 3 年ぶりに 2 割を超えた。ただ、インターンシップを実施し理解促進を図る企業が増えていることを考えると、選社軸に仕事内容を選ぶ学生がもう少し増えても良さそうだ。

＜就職先企業を選ぶ際に重視する点(上位15項目)＞



※全30項目から5つまで選択

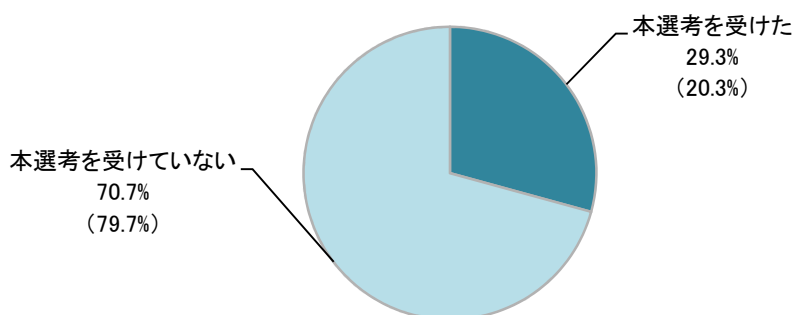
(%)

5. 1月1日時点の本選考受験状況と内定状況

インターンシップの選考を除く、本選考（採用選考）の受験状況を尋ねてみた。筆記試験や面接など「本選考を受けた」という回答が29.3%で、約3割の学生が早くも本選考の経験を持つことがわかった。本選考を受けた企業として挙げられた社名を見ると、外資系コンサルティングファームやマスコミ、IT企業などが目立つ。受験者を分母とした受験社数の平均は2.4社。

内定状況については、「内定を得た」との回答が4.7%。前年同期（3.1%）を1.6ポイント上回り、内定獲得のペースが早まっている様子が表れている。前年は2月調査時点で4.6%だったので、1カ月程度早くなっている計算だ。内定者の7割近く（68.4%）が「インターンシップ参加企業から内定を得た」と回答しており、インターンシップから早期内定に繋がっていることが読み取れる。

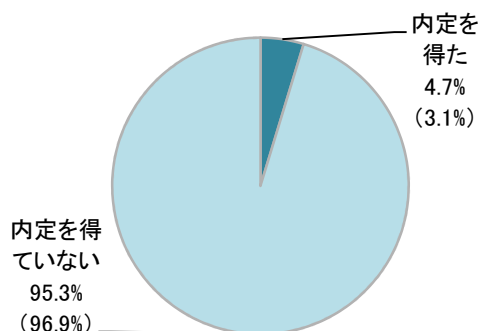
<1月1日現在の本選考を受けた企業の有無>



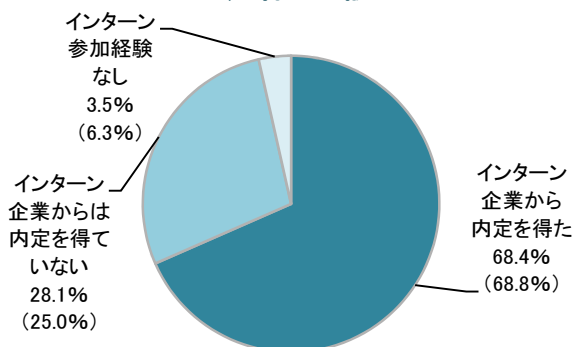
※()内は2018年の同調査での1月現在の数値

	全体	(前年全体)	文系男子	文系女子	理系男子	理系女子
本選考を受けた	29.3%	20.3%	34.4%	32.2%	21.1%	24.5%
本選考を受けていない	70.7%	79.7%	65.6%	67.8%	78.9%	75.5%
選考企業社数(平均)	2.4社	2.0社	2.3社	2.8社	2.0社	2.3社

<1月1日現在の内定の有無>



<内定者の内訳>



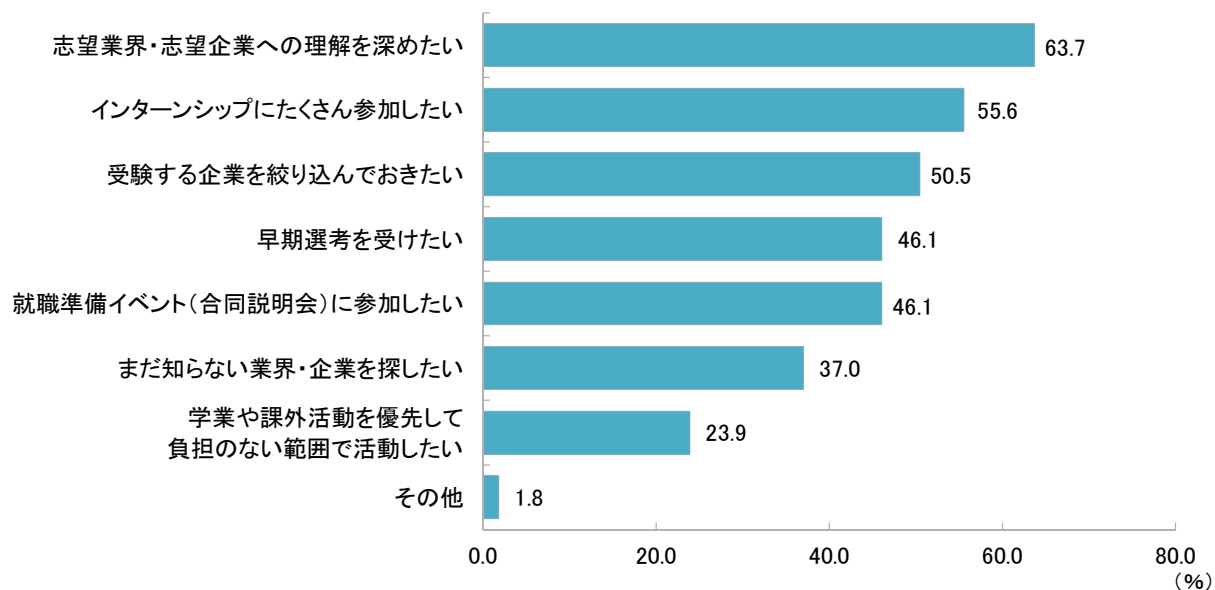
*「内定」には、内々定を含む

	全体	(前年全体)	文系男子	文系女子	理系男子	理系女子
内定を得た	4.7%	3.1%	5.8%	4.1%	3.4%	5.8%
内定を得ていない	95.3%	96.9%	94.2%	95.9%	96.6%	94.2%
内定社数(平均)	1.4社	1.3社	1.4社	1.5社	1.4社	1.1社

6. 就職活動解禁までの準備の進め方

今回アンケートに回答した学生は、3月の就職活動解禁までにどのように準備を進めようと考えているのだろうか。最も多かったのは「志望業界・志望企業への理解を深めたい」で6割強が選んだ(63.7%)。次いで「インターンシップにたくさん参加したい」(55.6%)が多く、企業理解を深めるためや、本選考を有利にするために、志望業界の企業を中心に参加したいという声も多く見られた。一方、「就職準備イベントに参加したい」(46.1%)、「まだ知らない業界・企業を探したい」(37.0%)もそれぞれ4割前後が選び、就職活動が本格化する前に、できるだけ多くの企業を見ておきたいと考える学生も少なくない。

<3月の就職活動解禁までの期間の準備の進め方>



■就活解禁までの準備の進め方

- 夏秋冬のインターンシップを通して就きたい仕事が把握できたため、その業界・企業の研究を行いたい。
<文系男子>
- 早めに志望業界の業務内容などの理解を深めておき、本選考に備えたい。
<理系男子>
- 今の段階では明らかに企業を知らなさすぎる。もっと多くの企業に出合って、少しでも可能性を広めたい。
<文系女子>
- 業界を絞りすぎると、後で違うと感じた時に、他の業界に行くための準備を一からしなければならないから、今のうちに幅広く業界研究をしておく必要があると思う。
<文系男子>
- 調べて分かることと実際に社員に聞いた話が違ったりするため、インターンシップに参加して確かめたい。
<理系男子>
- インターンシップに参加していた方が選考に有利だと聞いたから、できるだけ参加したい。
<文系女子>
- 大手企業の選考前に場数を踏みたいと考えている。
<文系男子>
- ある程度志望企業を絞り込んでおき、集中的に対策をたてたい。
<文系女子>
- まだどの企業が絞り切れていない状態であるため、このまま3月の就職活動解禁を迎えたら、後々苦労しそう。
<理系女子>
- 1つ内定をもらえば本当に行きたい会社に絞れるから、早期選考を受けたい。
<文系男子>
- 志望業界の選考はすでに始まっているため、3月解禁は関係ない。
<理系女子>
- 特に3年生までは学業を優先し、良い成績を取っておきたい。
<文系男子>
- 就活にも活きると思うので、現在の専門分野の研究を少しでも進めておきたい。
<理系女子>

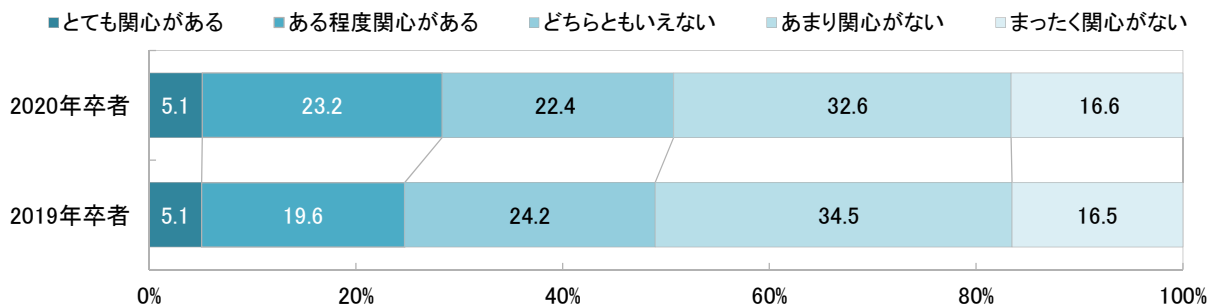
7. ベンチャー企業への関心

就職先としてのベンチャー企業への関心度合いを尋ねた。「とても関心がある」が 5.1%、「ある程度関心がある」が 23.2%で、ベンチャー企業への就職に関心があると回答した学生は 4 人に 1 人の割合 (計 28.3%)。前年の同期調査 (24.7%) に比べ 3.6 ポイント増加した。

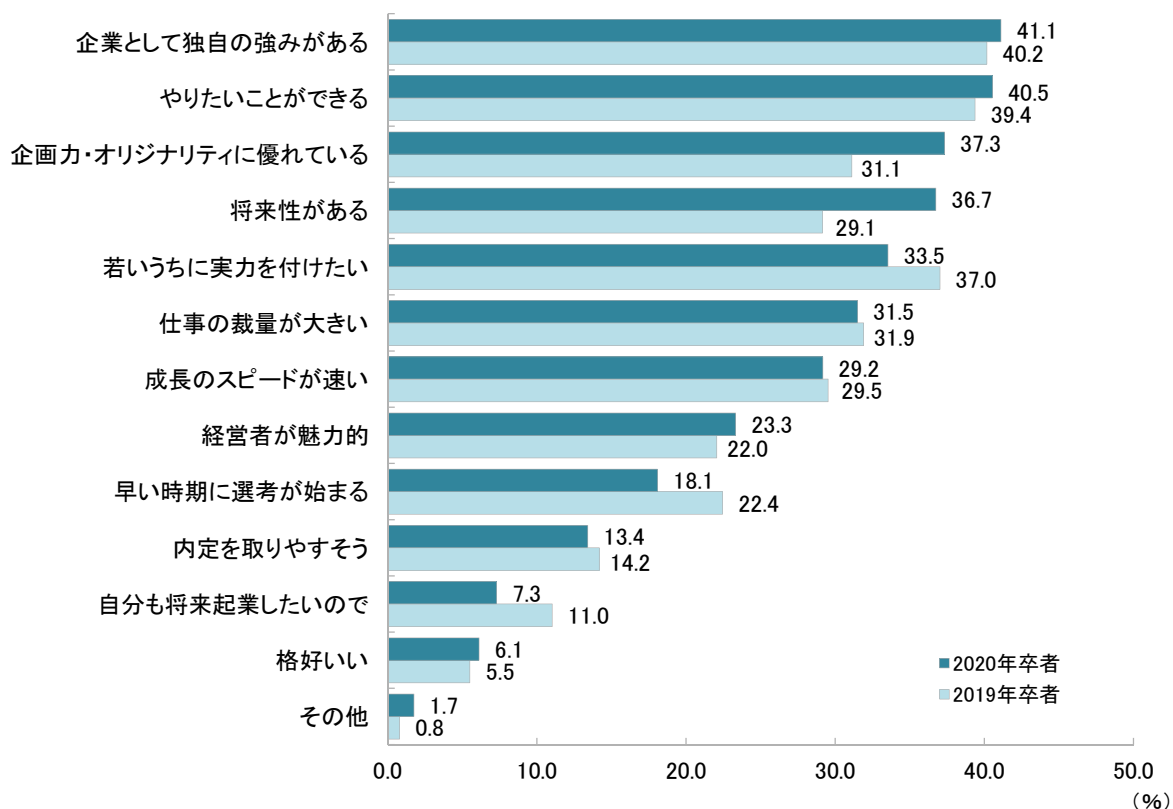
ベンチャー企業への就職に関心を持っている学生に、その理由を重ねて尋ねた。「企業として独自の強みがある」(41.1%)、「やりたいことができる」(40.5%) の順に多く、上位 2 項目は前年調査からの変動はない。ポイントの増減に注目してみると、大きくポイントを伸ばしたのは 3 位の「企画力・オリジナリティに優れている」(31.1%→37.3%)「将来性がある」(29.1%→36.7%)。先に見た就職先企業を選ぶ際に重視する点 (2 ページ) でも「将来性がある」は最もポイントが高かったが、ベンチャー企業に将来性を感じる学生が増えたことで、就職先として関心を持つ学生も増加したのだろう。

一方、最もポイントが減少したのは「早い時期に選考を受けられる」(4.3 ポイント減)。例年、早期から選考を実施するベンチャー企業は見られるが、企業全般の動きが早まり、その差が縮まっていることが要因だろう。

<ベンチャー企業への就職関心度>



<ベンチャー企業に関心を持っている理由>



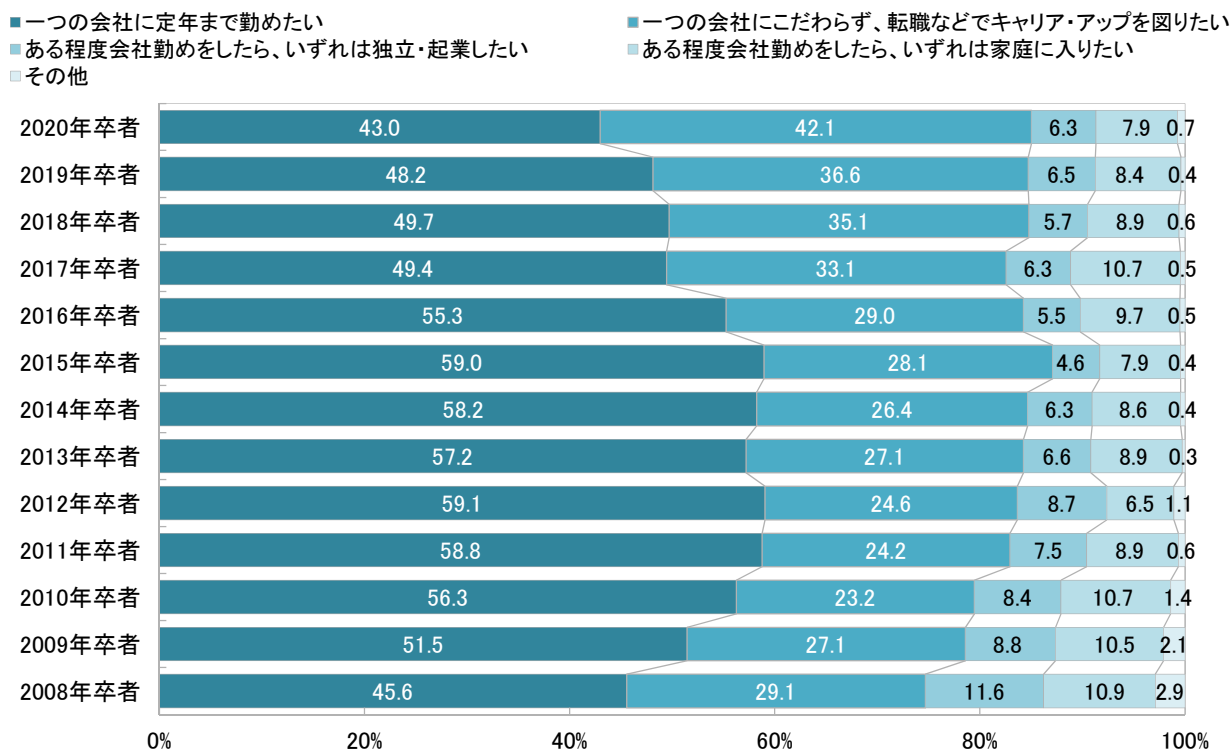
8. 就職後のキャリアプラン

現時点で考える就職後のキャリアプランを尋ねた。「一つの会社に定年まで勤めたい」という回答が 43.0%で最も多いものの、前年調査 (48.2%) より 5.2 ポイント減少。4 年連続で半数を割り込んだ。「一つの会社にこだわらず、転職などでキャリア・アップを図りたい」が 42.1%へと大きく増加し、「定年まで」と拮抗するかたちになった。

過去のデータを振り返ると、就職環境が厳しい時期は「一つの会社に定年まで」が増加し、新卒での就職を一生ものと捉える傾向が強まり、就職環境が好転すると減少する傾向が見られる。2008 年のリーマン・ショック後に「一つの会社に定年まで」は年々増加し、6 割近い数字を記録したが、売り手市場と言われてきたここ数年は減少が続いている。転職市場が堅調であることも後押しし、キャリアを柔軟に捉える若者が増えていると言える。

なお、今年の結果を文理男女別に見ると、理系男子において「転職でキャリア・アップ」が 49.0%と半数近いのが目立つ。

<就職後のキャリアプランの推移>



<就職後のキャリアプラン(2020年卒者)>

